

第19回 日本外来小児科学会 予防接種委員会 議事録

2016年7月31日(日) 12:00～

於：ホテル新大阪 東ロステーションビル

出席者(敬称略)：太田 文夫、岡藤 隆夫、落合 仁、中村 豊、牟田 広実、
横田 俊一郎、吉川 哲史、渡辺 博、永井 崇雄
オブザーバー 神谷 元
欠席者： 田原 卓浩、寺田 喜平、宮崎 千明、藤岡 雅司、武内 一、宮田 章子

協議事項

1. 第26回日本外来小児科学会 年次集会

1) シンポジウム4 ワクチン新世紀 今後の展望

8月28日(日) 9:00～11:30

座長 中村豊 宮崎千明

- ① 混合ワクチンの今後の展望 寺田喜平
- ② ムンプスワクチンの定期接種化に向けて 牟田広実
- ③ (話題提供)水痘ワクチンの有効性の検討 中村豊
- ④ 水痘ワクチンの定期接種後の課題 吉川哲史
- ⑤ 定期接種後のHBワクチンの課題 藤澤卓爾

講演時間は1人20分 その後個別で質疑応答 最後に集まってシンポジウム25分
HBワクチン

藤澤先生からの 講演概要

1 短期的課題

- ・ 定期接種の対象から外れた児への対応
- ・ HBV感染高リスク群への対応
- ・ Catch up immunization の必要性
- ・ 6種混合ワクチン (HexyonTM/Hexacima など)

2 中・長期的課題

- ・ HBワクチンの長期効果について
- ・ Occult HBV infection の存在
- ・ HBワクチンによる感染予防効果の限界
- ・ ワクチンエスケープ変異株の存在と対策
- ・ 高HBV量妊婦への核酸アナログ投与による母子感染予防対策

3 展望

- ・ がん予防ワクチンとしての有用性
- ・ B型肝炎は撲滅できるか

委員会参加者からの意見

ワクチン産生抗体価は 長期的には低下するが B cell memory は残る
Herd immunity は出来ていくだろう

母子感染予防と2本立てになる。家族内にキャリアがいる場合(High risk 群)などでは早期からの接種が望ましい。抗体価のチェックもしたほうがいい。

10月からの接種開始で、1歳で期限切れとなった追加接種を自治体が補助するところが多くある。接種開始を早めている自治体もある。

化血研のB型肝炎ワクチン製造ラインは止まったままであるが、MSDが潤沢にワクチンを持っているようだ。0.25mlのシリンジ型を作る方向

シンポジウムの質疑応答時に 予想される質問

①から⑤以外の質問が出るのではないかな？

1 百日咳 現在患者数が多い状態

LAMP法の保険適応が決まり、今後確定診断がしやすくなることから 患者数の増加が考えられる

追加接種をどうするのか、どのようにすすめていくべきか

2 日本脳炎 6ヶ月以上に接種をすすめる。現在千葉県ではワクチンの出荷調整が始まっている。ワクチン不足の原因として、北海道での日本脳炎ワクチン接種開始、東日本ではビケン製ワクチンのシェアが高く、品薄になっていること。小児科学会からの勧告。NHKで取り上げられた千葉県での取り組みが影響している。

3 MMR ムンプスワクチンはやはり輸入(Jeryl-Lynn?)になるのか

4 フルミスト 米国では接種勧奨中止に。→ インフルエンザはパネルディスカッションで議論されるかな？

1や2に関しては、宮崎先生にお答えをしていただく方向で。

2) WS27-1 小学生・中学生に予防接種を知ってもらおう！！ PART3

8月27日(土) 9:00~11:30

リーダー 落合仁 サブリーダー 太田文夫 乾浩明

三重大教育学部大学院生 の協力を得、すべての教科書の記載を参考にして新しくタブレット型端末による電子紙芝居を作成した。5-6年生を対象に見てもらい、教員は質問に答えていくという授業形式が望ましいのではないかな。

「わたしたちの健康を守る ワクチンのおはなし」 小冊子を参考資料とする。

学校保健委員会や就学前健診の時間などを利用できないか？

ワークショップは医師だけの参加に限定

2) パネルディスカッション インフルエンザ

①ML インフルエンザの流行情報データベースから見た近年のインフルエンザ流行状況の変化について 西藤成雄

②インフルエンザ HA ワクチンの2回接種は全小児に必要なか 鈴木英太郎

③現行のインフルエンザワクチンの効果と限界について 中山哲夫

④自然免疫から見た、より効果的なインフルエンザワクチンの開発について

石井 健

2. 予防接種後副反応に関するサーベイランスシステム構築について

神谷 元 先生 (感染研)

現在予防接種の有害事象を捉えるシステムとして、Pmdaによるデータ収集が行われているが、ここで挙がってきた、もしくはマスコミなどのメディアが有害事象として取り上げる事象が、真に予防接種に関連したものかを捉えるシステムが日本にはない。米国のVAERSのデータでも、まれな有害事象の早期シグナル検知には有効であるが、データの質は不十分であり、因果関係は評価できず、ワクチンを接種していない比較対照群がない。

これを補う目的で、米国でのVSD (Vaccine Safety Datalink) デンマークの国民総背番号制、英国のGPRD (general Practitioner Reserch Database)などのシステムがあり、現在の日本で実現可能と思われるのは、英国のシステムである。国に必要性を認知していただくためにも、システムを作って行きたい。

現在 西藤先生が運営されている MI-flu-DB の経験、や西藤先生のノウハウを利用して、

- ① 予防接種有害事象調査のための医師データベースを作っていく
- ② 登録医をつのり、参加希望医師のリストを作る。
- ③ 登録医には、適宜予防接種関連の情報を流してインセンティブとし、モチベーションの維持に努める
- ④ 予防接種との因果関係を疑う事象が発生したときには、登録医師に情報を流し、一定期間中の当該予防接種の接種人数、事象の発生件数を調査する。接種しているのに当該事象が起こっていない接種者の数を把握していくことに狙いがある。

委員会としての意見

予防接種委員会としての事業としていくことで、費用の問題をクリアできる

学会誌や学会の一斉メールで参加医師の数を増やすことが期待できる。
パイロット的に今の MI-flu-DB で一度試みてみたらどうか。
実際に運営する上で、感染研と外来小児科学会の倫理委員会を通す必要がある。
そのためにも事業計画の作成が必要。

報告事項

1. 日本外来小児科学会会員へのロタウイルスワクチン接種法に関する調査
牟田広実

今度の年次集会で発表予定

ロタワクチンの飲ませ方はさまざまにいろいろな工夫が行われている。
接種中の工夫で、早く飲ませることができる（30秒以内）ものとして
啼泣中も接種をする。口唇や下顎を抑えない ことであった。

2. 日本小児科学会予防接種・感染対策委員会報告
ジカ熱についての討論があった。Q&Aの作成中

次回の委員会は 10-12月に 多くの委員の参加ができる日に。